

むかし、大太郎とて、いみじき、盗人の大將軍ありけり。それが京へのぼりて、物とりぬべき所あらば入りて物とらんとて思ひて、うかがひ歩きける程に、めぐりもあばれ、門などもかたかたは倒れたる。よこぎまよせかけたる所の危げなるに、男といふものは一人もみえずして、女のかざりにて、はり物多くとり散らしてあるにあはせて、八丈売る者など、あまたよび入れて、絹多くとり出でて、選りかえさせつつ、物どもを買へば、もの多かりける所かなと思ひて、たちどまりて見入るれば、折しも、風の南の簾を吹あげたるに、簾のうちに、なにの入りたりとはみえねども、皮子に、いと高くうち積まれたる前に、ふたあきて、絹なめりとみゆるもの、とり散らしてあり。これを見て、うれしきわざかな、天道の我に物を給ぶなりけりと思ひて、走り歸りて、八丈一疋人に借りては、来て売るとて、ちかくよりて見れば、内にもほかにも、男よいふものは一人もなし。ただ女どものかざりして、見れば、皮籠もおほかり。物は見えねど、うづたかく、ふた溢れ、絹なども、ことのほかにあり。布うち散らしなどして、いみじく物多くありげなる所かなと見ゆ。高くいひて、八丈をばうらでもちて歸りて、ぬしにとらせて、同類どもに、「かかる所こそあれ」と、いひまはして、その夜来て、門に入らんとするに、たぎり湯を面にかくるやうにおぼえて、ふつとえ入らず。「こはいかなることぞ」とて、あつまりて、入らんとすれど、せめて物のおそろしかりければ、「あるやうあらん。こよひは入らじ」とて、歸りにけり。

つとめて、「さも、いかなりつる事ぞ」とて、同類など具して、うり物などもたせて、見てみるに、いかにもわづらわしき事なし。物多くあるを、女どものかざりして、とりにいで、取りおさめすれば、ことにもあらずとかへすがへす思ひみふせて、又暮るれば、よくよく、したためて、入らんとするに、猶おそろしく覚えて、え入らず。「わぬし、まづ入れ」と、いひたちて、こよひもなほ、入らずなりぬ。

又つとめても、おなじやうにみゆるに、猶けしき異なる物も見えず。ただ我が臆病にて覚ゆるなめりとて、またその夜、よくしたためて、行向てたてるに、日ごろよりも、猶ものおそろしかりければ、「こはいかなることぞ」といひて、かへりて云ふやうは、「事を起したらん人こそはまづ入るらめ。先大太郎が入るべき」と云ひければ、「さもいはれたり」とて、身をなきになして入りぬ。それに取りつきて、かたへも入りぬ。入りたれども、なほ物のおそろしければ、やはら歩みよりてみれば、あばらなる屋の内に、

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

2 めぐり＝囲い、あばれ＝あばら家のあばれ。荒れた様子。

3 はりもの＝布などの今でいうアイロンがけ。反物屋で衣料などの販売をしているようだ。

4 八丈という絹織物を借りてそれを売るふりをして偵察に行つたわけだ。

火ともしたり。母屋のきはにかけたる簾をおろして、簾のほかに、火をばともしたり。まことに、皮子の多かり。かの簾の中の、おそろしく覚ゆるにあはせて、簾の内に、矢を爪よる音のするが、その矢の来て身にたつ心ちして、いふばかりなくおそろしく覚えて、帰りいづるも、<sup>1</sup>せをそらしたるやうに覚へて、かまへていで得て、あせをのごひて、「こはいかなる事ぞ、あさましく、おそろしかりつる爪よりの音や」といひあわせて帰りぬ。

1 背を逸らした  
背中から狙われた

そのつとめて、その家のかたはらに、大太郎がしりたりけることのありける家に行きたれば、みつけて、いみじく饗應<sup>きやうよう</sup>して、「いつのぼり給へるぞ。おほつかなく侍りつる」などいへば、「ただいままうで来つるままだ、まうで来たるなり」といへば、「かはらけ参らせん」とて、酒わかして、くろき土器の大なるを盃にして、土器をとりて大太郎にさして、家あるじのみて、土器わたしつ。大太郎とりて、酒を一土器受けて、持ちながら、「この北には誰が居給へるぞ」と言へば、おどろきたるけしきにて、「まだ知らぬか。おほ矢のすけたけのぶの、このごろのぼりて、居られたるなり」といふに、さは、入りたらしかば、みな、かずをつくして、射殺されなましと思ひけるに、物もおほえず臆して、その受けたる酒を、家あるじに、頭よりうつかけて、たちはしりける。物はうつぶしに倒れにけり。家あるじ、あさましと思て、「こはいかにこはいかに」と云ひけれど、かへりみだにもせずして、逃げて去にけり。

2 何者なのか分らないが、「武者の城」というからには、集団の感じがする。

大太郎が捕られて武者の城のおそろしきよしを語りける也。